

【展示報告】

大学史特集展示「戦時下の学生・2 学問と白球と」

——ある横浜専門学校生の1940-1942」 二〇二二

大坪 潤子

二〇一五（平成二十七年）五月、大学資料編纂室はある資料群の寄贈を受けた。内容は神奈川大学の前身・横浜専門学校で用いられた教科書や参考書などの書籍や学帽、卒業アルバムなどで、その数約一四〇件に及ぶ。編纂室では本学の歩みに関わる資料の収集も行ってきたが、横浜専門学校関連の資料をこれほど大量に受贈するのは近年稀であった。旧蔵（使用）者は寄贈者森島眞澄氏の父・森島輝雄氏（一九二二—二〇〇九）である。

資料の大半は森島輝雄氏の学びや野球部での活動に関わるものであるが、整理を進める過程で、これらは氏個人のみならず当時の横浜専門学校生の日常や世相を映し出す資料群として大いに活用すべきと判断された。おりしも戦後七〇年を迎え、編纂室として何か関連した企画を実施できないかと検討していたこともあ

り、これらの資料を基に本学横浜キャンパス三号館展示ホールの一角で特集展示を行う運びとなった。二〇一四年三月に同ホールがオープンして以来、大学史としては常設展示以外初の試みである。

展示企画では以前大学図書館内で開催していた特別展示の中からテーマを引き継ぎ、タイトルは「戦時下の学生・2 学問と白球と——ある横浜専門学校生の1940-1942」とした。ケース二台での実物資料展示と壁面でのパネル展示という小さな規模ではあるが、歴史上の著名な人物や大きな出来事ではなく等身大の一人の学生を通して、戦時下の横浜専門学校生の在り様とそれを取り巻く環境を示そうという試みであった。本稿ではこの展示を振り返ると共に、その後追加で寄贈された資料も使用しつつ森島輝雄氏自身についても若干踏み込んで紹介しておきたい。

森島輝雄氏（以下森島氏）は、一九二二（大正十一）年に岐阜県で生まれた。旧制の海津中学校在学中に野球部で捕手をつとめ、一九三九（昭和十四）年八月、全国中等学校優勝野球大会（現在の全国高等学校野球選手権）東海大会に初出場した。初戦で敗退するも強豪の岡崎中学校を相手に力闘して、学校から表彰されている。^②当時の森島氏の日記からは、腕の痛みを抱えつつの野球への情熱、また大会直前に立教大学の選手をコーチとして招くなど学校側の意気込みも伝わってくる。一方、学校では軍事教練も行われており、定期考査の直前に演習で夜間行軍をして疲れきったり、一方で教練の運動を楽しんだり、といった様子が記される。既に教練は日常の一部となっていた。^③

日記が十一月で途絶えているため経緯が不明だが、その後森島氏は横浜専門学校^④の給費生試験を受験した。結果、給費生としては不合格だったものの無試験検定出願資格が認められ、一九四〇（昭和十五）年四月、横浜専門学校（以下横専）の貿易科に入学、同時に野球部に入部している。横専野球部は前年の全国高等学校野球大会で優勝しており、ここで野球を続けることが森島氏が横専を目指した理由の一つになったと考え

てよいだろう。同期入部には愛媛県の松山中学や台湾の嘉義中学校など野球で知られる学校の出身者たちがいて、森島氏はキャンパス内の野球部合宿所で彼らと共同生活をしつつ、横専生として過ごすことになる。

しかし、戦局の拡大に伴う兵力確保のため修業年限（徴集猶予期間）が短縮され、予定より半年早い一九四二（昭和十七）年九月に卒業を迎えたのであった。



写真1 火鉢の前の森島輝雄氏／横浜専門学校野球班卒業アルバム（1942年9月）より

特集展示ではこの入学から卒業までの二年半の間に使われたと考えられる教科書や学帽、野球帽等計十三点をケースに展示、また貿易学科と野球部の卒業アルバムから十一頁分をA1パネルとし壁面に展示した（写真1～3）。



写真2 グラウンドで集合／横浜専門学校野球班卒業アルバム
(1942年9月)より

横浜専門学校のグラウンドは、1938（昭和13）年に学生たちの手によって整備された。



写真3 「査閲」／横浜専門学校貿易科 第12回卒業記念アルバム
(1942年9月)より

横浜専門学校グラウンドでの軍事教練における査閲。

横専において具体的にどの教科でどのようなテキストが用いられたかは現在詳らかでないが、森島氏の旧蔵書の中でその内容や記名から教科書や参考書だったと考えられるのはおよそ七〇冊に及ぶ。その内、当時の教員が著したものとして、江本茂夫（一九三九年着任、一九四一年陸軍に再召集）の英語テキストから二冊『CHARACTER BUILDING THROUGH ENGLISH』（莊人社、一九三八年）及び『EMOTO'S RAPID ENGLISH COURSE』（同前、一九三九年）と、菊原清の『保険論』を展示に選んだ。前者は横専名物でもあった熱心で実践的な江本式英語教育の一端を窺えるもので、森島氏の書き込みも見られる。後者は手書き原稿をいわゆるザラ紙に謄写版印刷したもので奥付がないが、著者の菊原清は当時横専の教授で、裏表紙に「第三学年森島」の記名があることから、一九四二（昭和十七）年の講義用テキストとして作成されたものと考えられる。また同年六月消印の検閲済葉書が一葉挟まれており、いずれも物資や情報面で統制下にある時代状況を実感させる資料である。

なおこれ以外にも頁の間に試験問題や森島氏の名刺などの挟み込みがあり、それぞれ興味深いものであつ

たが、中でも島田孝一著『交通政策』（一九四二年）のケースと本体の間から『横専学報』の一一〇号（一九四二年二月十五日）が現れたのは特筆すべきことであった。横浜専門学校校友会雑誌部による学生新聞『横専学報』は、一九三〇（昭和五）年に創刊されこれまで一〇一号（一九四一年五月五日）までの発行が確認されていたが、一〇二号以降の継続が不明だったのである。これを明らかにした一一〇号は、早速の初公開となった。今後、一〇二号から一〇九号の入手と一一一号以降の有無を確認することが課題となる。

また、教科書や参考書と思しきものの以外にも横専在学時に読んだと推測できる書籍が多数あり、この中から河合栄治郎編『学生と生活』（日本評論社、一九四〇年）、野村光一著『レコード音楽 名曲に聴く上巻』（創元社、一九四〇年）、片山彰彦訳『バイロン詩集』（京文社、一九四一年）ほかを展示した。河合栄治郎はファシズム批判により東京帝国大学の職を解かれた後もこうした編著書を通じて学生たちに理想を説き続け、野村光一は巻頭に「本書を執筆し始めた時は支那事変は未だ起こつてゐなかつた。（中略）吾がレコード業界も、現在、異常な局面に直面しつゝ、あるや

うだ」と記した。当時、横専生がよく訪れた伊勢佐木町などには音楽喫茶があり、そこでのレコード鑑賞は横専生の身近な愉しみであった。英国の詩人バイロンは明治時代からその情熱的な詩が翻訳出版され続け、片山訳の初版は一九三九年、森島氏が読んだ版は一九四一年十二月、太平洋戦争開戦の月のものである。——このように、森島氏個人の趣味嗜好の紹介に留まらず、日中戦争勃発（一九三七年）、第二次世界大戦開戦（一九三九年）、そして太平洋戦争へ（一九四一年）と続く時代や横専生の日常を意識できるよう、資料展示には最低限の解説を付した。

蔵書に見られるとおり森島氏は詩を好んだようで、貿易科の卒業アルバムの寄せ書きには、級友たちが学生生活や級友について思い思いの言葉を記す中で独り、西条八十の詩「わすれなぐさ」⁸を引いている。この詩を含めて寄せ書きには戦争を直截に想起させる言葉は少ないが、実際には、卒業後は入営、というのが卒業生の大多数の「進路」であり、森島氏も卒業の半年ほど前には徴兵検査を済ませていたようである⁹。

この寄せ書きのほか、野球班の卒業アルバムから合宿所や近隣の飲食店などでのまさに青春を謳歌するよ

うな写真、貿易科のアルバムから一九四二（昭和十七）年のシンガポール占領を記念した横浜の専門学校五校¹⁰による学生会、横専のグラウンドでの軍事教練の写真などを拡大バネル化した。場所の特定などには地域の方々にもご協力いただいた。

次に、展示では殆ど触れられなかった卒業後の森島氏について記しておく。

先述のとおり一九四二（昭和十七）年九月に繰り上げ卒業した森島氏は、間もなく岐阜県の陸軍歩兵第六十八連隊に入営する。次にここを原隊として愛知県の豊橋陸軍予備士官学校に入校し、翌年十二月に甲種幹部候補生として卒業した。その卒業アルバムの寄せ書きに森島氏は一言、「死」と記している。横専卒業時に詩を寄せた青年の、環境と内面の変化を伝える一言である。続いて森島氏は三重県鈴鹿市の陸軍第一航空教育隊で見習士官として軍役に就き、さらに宮城県名取郡の仙台陸軍飛行学校に転属し少尉となった。ここで航空通信を学んだ後、中国（北支）で中尉として通信班の軍務にあつたとみられる。終戦後は三重県桑名市のベアリング工場に勤めた後、岐阜に帰って自営業をしつつ、長良川河口堰問題に終生取り組んだということである¹²。

今回の展示では「戦時下の学生」という言葉によってとすれば導いてしまいがちな、戦時色一色に染まった暗い学生像とは異なる、しかしこの後急速に輝きを失っていくであろう光彩を、現在の学生たちが展示資料や解説から感じとってくればという期待も込めていた。この点について、森島氏卒業の翌年に学徒出陣が始まったことなどその後の変化を掲示年表で触れたのみで、その前段としての森島氏の二年半という時期を、相対的に示すことは不十分であった。また残念ながらアンケートを実施できず展示の感想を充分に知り得ていない。しかし会場では、軍事教練の写真を指して自分の祖父のことを友人に語る姿などがあつた。多くの学生にとっては二世代前となる事象を、少しでも身近に引き寄せて感じてもらえたのなら幸いである。

註

- (1) 寄贈資料「大阪朝日新聞」(名古屋市内版、一九三九年八月二日付六面)
- (2) 寄贈資料「賞状(海洋中学校野球部森島輝雄)」
- (3) 寄贈資料「袖珍当用日記 昭和十四年」
- (4) 寄贈資料「昭和十五年度給費生採用試験結果通知書」
- (5) 現愛媛県立松山東高等学校。一九三三(昭和八)年の第

十五回全国中等学校優勝野球大会に出場した。

- (6) 現国立嘉義高級中学。全国中等学校優勝野球大会(甲子園)に一九三七年(準々決勝進出)と一九三九年に出場。一九四一年も台湾での予選会で優勝したが大会中止のため出場せず。二〇一四年の台湾映画「KANO」の嘉義農林学校とは別の強豪校である。

- (7) 野球部は他の部と同様、一九四一年二月の横浜専門学校報国団結成時に「部」から「班」へと改称された。

- (8) 西條八十の詩の全文は「わすれなぐさは空のいろ わすれなぐさは水のいろ わすれなぐさは忘れじと ちかいて遠く別れたる かなしきひとの眸の色」(初出は『少女画報』一九二八年五月号)。

- (9) 寄贈資料「寄留地身体検査受驗通常(臨時)願」

- (10) 当時「ハマの五専門」と呼ばれた、横浜専門学校、官立横浜高等商業学校、官立横浜高等工業学校(現横浜国立大学)、市立横浜商業専門学校(現横浜国立大学)、関東学院高等商業部(現関東学院大学)の五校。

- (11) 軍事教練は一九二五(大正十四)年から中等学校以上で正課となった。専門学校での内容は各個訓練、部隊訓練、射撃、指揮法などである。

- (12) 森島眞澄氏の御教示による。また、眞澄氏所蔵の予備士官学校時代の日記等からは「バリバリの軍国青年」像が窺えるが、戦後は労働運動に関心が高く、社会党の地区長のようなことをしていた、という。